

映像を用いた難病患者の生の記述と発信 —多声的研究としてのビジュアル・エスノグラフィーの試み

安 達 俊 祐
(立命館大学大学院)

今回は、「映像を用いた難病患者の生の記述と発信—多声的研究としてのビジュアル・エスノグラフィーの試み」という題で発表させていただくんです。まず、従来のエスノグラフィーについて少し話をさせていただきますと、従来のエスノグラフィーは、文字ベースのものでした。文字や、たまに写真を使ったものですが、やはり文字で表現され、論文化されたエスノグラフィーが中心でした。これは、やはり、読んでいてしんどいという点もありますし、ほかにも、エスノグラフィーを読みなれてない人に読んでいただいてもなかなか理解しづらいところがある。言ってしまうと、一般の方になかなか研究を伝えることが難しいんじゃないかという問題点が一つあります。

研究発表にふさわしいのは、本当に文字だけなのかということですが、例えば、昨日この学会で開かれていたような、ポスター発表等もありますね。また、今回のようなこういう口頭発表等もあります。こういうのは、やはり文字ではない発表ですので、文字ではない発表をしていることによって、やはり文字だけではなく、ほかの方法でも研究発表はできるのではないかと考えてくれたのが、文章ではなく映像でエスノグラフィーを、研究を発表できないかという試みです。これが「ビジュアル・エスノグラフィー」と呼ばれるものなんです。

では、ビジュアル・エスノグラフィーはどのようなものかというところ、UCLA、University of California, Los Angelesで1960年代、人類学の分野で始められたものです。そして、このビジュアル・エスノグラフィーという研究を通して、トビン (Tobin, 1989) という方が新しい研究方法を確立しま

した。それが「マルチボーカル・ビジュアル・エスノグラフィー」というものです。この『Preschool in Three Cultures』という本で紹介されている研究方法ですが、マルチボーカルは「多くの声」と書いて「多声的研究」と言われています。どのようなものか。トビンさんが行った研究を少しでも紹介させていただきたいと思います。

まず、トビンさんは幼稚園をカメラで撮影したんですね。どういう映像かというと、日本の幼稚園、中国の幼稚園、アメリカの幼稚園、この三つの幼稚園の映像を撮影しました。この三つの映像を、国内の保育園関係者、国外の保育園関係者、そして保育園関係以外の人の3人に見てもらおうと。つまり、日本の幼稚園の映像を、日本の保育園の人、中国、アメリカの保育園の人、保育園関係以外の人に見てもらった。つまり、一つの文化に対して3人の声、3掛ける3で合計九つですね。九つの声を集めて研究を行った。つまりここから多くの声というわけです、これで多声的研究です。さらに、ここで映像を用いている。つまりこれがビジュアル・エスノグラフィーということで、マルチボーカル・ビジュアル・エスノグラフィーという研究方法が確立したわけです。

ここでちょっと話を変えまして、エスノグラフィーの倫理的問題について少し言及したいと思います（図1）。従来のエスノグラフィーは観察者がいますよね。観察者がいて、被観察者がいると。ここの相互的關係があり、観察を通して観察者が研究発表をするのが従来のエスノグラフィーの形です。ただ、ここで一つ問題とされるのが、研究と被観察者の間の關係性が成り立っていないということです。例えば少し大ざっぱな例ですけども、私が今、この場を観察していたとします。観察していると、皆さん、どうもつまらなさそうにしていると。何か眠たそうな人もいます。下を向いている人もいます。ということは、やはり、「こういう私の研究に皆さん興味がないということがわかったんです」と論文発表をするかもしれない。もし、ありがたいことに「そうじゃない」という反論があったとしますね。「なかなかおもしろいじゃないか」と、「聞いてやってもいいぞと思っていた」と皆さん思っていた場合に、私は皆さんの様子を見て、「こうこうこういうふうに見えました、だ

から皆さんは私の発表に興味ないです」と発表することができてしまうわけですね。つまり、ここで被観察者が、「本当に私はそうじゃないんですよ」と言いたかったとしても、私はその意見を聞かずにこのまま発表できてしまう。これは一つ大げさな例ですけども、やはりこのような倫理的問題がある。つまり、それを解消するための方法を考えないといけない。つまり、被観察者の人が研究に対して意見を述べるのが、やはり必要ではないかと考えます。

ただ、ここで意見を述べるということは、被観察者がこの研究を理解しないといけない。つまり、この研究を被観察者にうまく、わかりやすく伝える必要があるということですね。

では、その研究内容を伝えるにはどうすればいいかということですけども、最初にも言いましたように、このように文章でなかなかわかってもらうことはできない。当然ですよ。レポートをばっと渡して、これ読んでおいてくださいと。で、意見くださいというのは、やはりそれは無理だと。じゃあ、どうしたらわかりやすく伝えることができるかということで、今回、提案するのが映像ということなんです。ここでビジュアル・エスノグラフィーを用

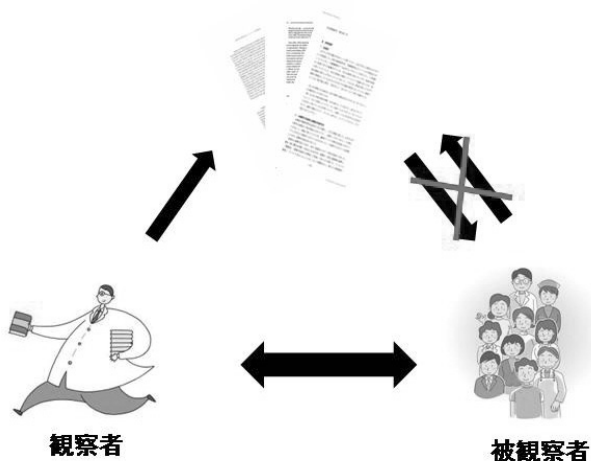


図1 エスノグラフィーの倫理的問題

いて、場の人々に研究内容をわかってもらおう、意見をもらおうというのが、今回の発表した試みですけども、実際には私が研究した内容をここで発表させていただきたいと思います。

場の人々の声を聞くということで、今回、観察対象とさせていただいたのが、杉江さんですね。ALS患者さんの杉江さんという方です。少し杉江さんの紹介をさせていただきますと、2001年にALSと診断を受けました。今回はコミュニケーションをテーマとして観察を行ったんですけども、コミュニケーションには文字盤を用いています。

文字盤をご存じない方がおられるかもしれないので、少し説明させていただきます。透明の板に、「あいうえお」と書かれている。こういうふうに患者さんと読み取る人の前にかざしまして、例えば患者さんが「あ」と言いたかったとします、すると患者さんは「あ」を見ますね。すると、こういうふうにずらしていったら、目が合ったところが、向こうの言いたい言葉だというふうにして読み取っていく。次が例えば「ね」だったら、ここを見たら、こうやって目が合ったところ。こういうふうにして1文字ずつ読み取っていく、これが文字盤なんです。

さらに週3回リハビリに通っているということで、今回、リハビリの場面を観察の場とさせていただきました。リハビリの場面について少し説明させていただきます。これが写真でリハビリの場面ですけども、今回、コミュニケーションというテーマなんで、基本的にはリハビリを担当する看護師さんと杉江さん、この2人がコミュニケーションを図っています。ただし、リハビリの場面、文字盤を用いてしまいますと、ここに文字盤を読み取る人が座ったり立ったりしなきゃいけないので、リハビリが止まってしまうわけです。というわけで、このリハビリの場面においては、コミュニケーションするのに文字盤が用いられていないということですね。全部で6回ぐらい観察しに行ったんですけども、その中で文字盤が使われたのは本当に1回だけだったので、もう全く使われていないと考えてもらって結構です。

そして、さらにヘルパーやほかの看護師などが同じ場にいるということも重要です。リハビリの場所に、ほかの看護師とかも、たまに、この辺でほか

の患者さんのリハビリをしていたりだとか、たまたま歩いて通りかかったからとかいって話しかけてきたりとか、そういうことがあるわけです。これが、第三者の存在がこの場にはあるということで、この後、重要になっていくので覚えておいていただければ幸いです。

観察の結果、わかったことなんですけども、杉江さんとリハビリの看護師さんのコミュニケーションなんですけども、そのコミュニケーションの発生数が多い日と少ない日があったんです。

これは何が違うのかなと考えたところ、多い日にはコミュニケーションに第三者が介入していた。第三者が、このヘルパーだとかほかの看護師さんですね。が、そのコミュニケーションに介入することによって多くのコミュニケーションが発生した。さらに、その第三者の介入方法には四つの種類がありました。

また、杉江さんに対する質問を、看護師の人がヘルパーに訪ねるという場面が多く見られたんですね。一つ例を挙げますと、杉江さんのお薬の量って減りましたかと、この質問をヘルパーさんに尋ねるわけです、杉江さん本人ではなく。そういう場面も見られたと。

さらに第三者が介入すると、看護師から杉江さんに対する語りかけが減ってしまったんです。

この結果からどうことがわかるかといいますと、通常のコミュニケーションには、看護師と杉江さんがここでコミュニケーションが図られている。しかし、杉江さんは発話ができない状況なので、看護師の語りかけに対する反応がなかなか示しにくいわけですね。うなずいたり、笑ったりはできるんですけども、やはり発話で返すことができない状況から、どうしても看護師は一方的な語りかけになりやすいということで、ここのコミュニケーションは徐々に減っていってしまう現象が見られたわけです（図2）。

その克服というか、コミュニケーション数をふやすために出てきたのが、この第三者の存在なんですね。ここに、ほかの看護師さんやヘルパーの方がこのコミュニケーションに入ることによって、コミュニケーションは円滑にという表現が正しいかはわかりませんが、進むということがわかりまし

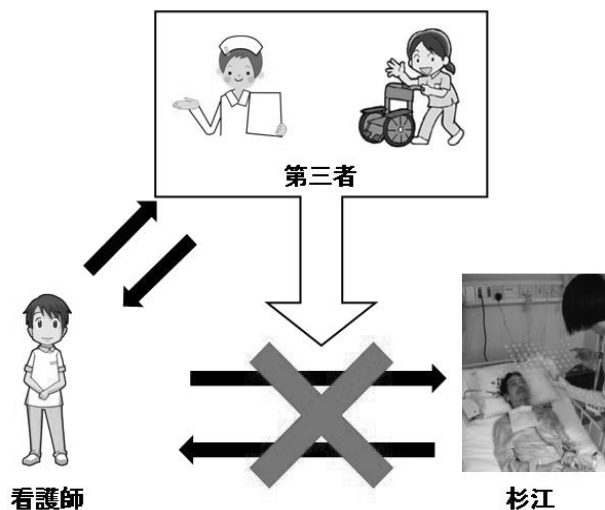


図2 リハビリ場面における問題

た。

すると、ここの看護師さんと第三者の間で、ここでコミュニケーションが発生することになるわけです。そうすると、ここで話し込んでしまって、杉江さんとのコミュニケーションが少し少なくなってしまう、減少してしまう。このことから、杉江さんの、この場から存在がなおざりになってるのではないか。この第三者の介入によって、ALS患者さんの存在がなおざりになってしまうのではないかという考察を得ました。

さらにもう一つ、第三者が杉江さんではなく、そのヘルパーに質問をするという場面が見られたということがあったんですけども、そのことから、そのヘルパーが杉江さんの代弁者として、杉江さんの意見をかわりに語ってくれる人として、みなされているのではないかとこの考察を得たんです。これが研究1の考察ですけども、こころがマルチボーカル・ビジュアル・エスノグラフィーということですけども、この研究の内容を映像にしました。その映像を杉江さんとヘルパーのお二人に見ていただいて、その意見を述べてもらったんですね。こういう考察を得たんですが、どう思いますかという考

察を得たわけです。

私はこの研究1で観察から得た考察として、「第三者の存在がALS患者さんをなおざりにしている」という問題が、リハビリの場面を通して提起されたという、つまりリハビリの場面でこのような問題が見られたという場面の問題について特に焦点を当てました。

そして、その現場の人々のこの場面、映像に対する意見はどのようなものだったかという、リハビリ場面においては、そのような問題はないというコメントをいただきました。もう少し詳しく言いますと、研究の内容は概ね正しいということは言うただけで、さらに、日常生活では確かにそのような問題は起きているとのことでした。第三者に対して話しかけてしまって、私が無視されるような状況はある。ただし、リハビリの場面においては、それは問題ではないと捉えているとおっしゃられたわけです。

ここからインサイダー、つまり文化内の人々、患者さんやヘルパーさんと、アウトサイダー、文化外の人々、研究者ですね、研究者との間で意見の相違が生まれたわけです（図3）。この意見の相違がどういうことかを考察する

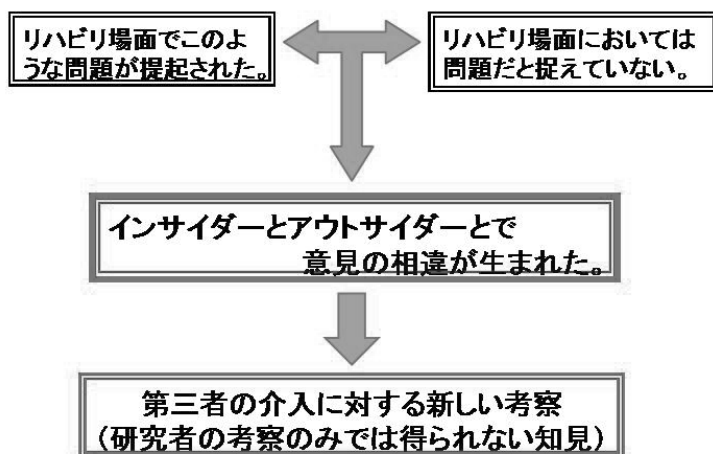


図3 研究者と場の人々の意見のズレ

のが、このマルチボーカル・ビジュアル・エスノグラフィーの一つなんですが、ここから相違が生まれた。つまり、第三者の介入は、私が考えているより何かもっと違う意味があるんじゃないかという新しい考察を得られたわけです。これは、つまり研究者の考察のみでは得られない知見だったと言えると思います。

一般のエスノグラフィー研究では、ここで一連の研究プロセスが止まってしまうので、このアウトサイダーの常識のバイアスのまま研究が発表されてしまう可能性があります。かと言って逆に、インサイダーの意見だけだと、インサイダーの常識のバイアスにとらわれた発表になってしまうということから、二つの常識を統合させることによって、一つの考察を得ることが重要ではないかということを言わせていただきたいと思います。

最後にですが、今回、トビンの行ったマルチボーカル・ビジュアル・エスノグラフィーは、ローデータに対する意見の収集でした。どういうことかといいますと、幼稚園の映像を映したわけですね。幼稚園の映像を見てもらって、どう思いますかと言ったわけであって、決して研究者の考察を場の人々に伝えたわけではないんです。ですが、私の今回の研究は、私が得た考察を映像にして場の人々に見せた。つまり、その映像には、もちろん研究者の恣意性がふんだんに盛り込まれているわけですね。それが目的ですから、どういうふうに私が考えたかをわかってもらうための映像なので、そういう点では、トビンの研究とは少し違うものであるかなと思いました。

今回は、そういうふうに考察を見てもらって、そこに対して意見を述べてもらい、さらに新しい考察を練り上げるということから、研究で得られる考察の中に場の人々の語りの場が設けられているというのが言えると思います。

最後に、杉江さんのヘルパーさんと、観察中に仲よくなったので少し話していたときに、このようなことをおっしゃられていました。「今の社会は、患者さんの語る機会が非常に少ない。そして、その声を社会に届けることができない」、ということをおっしゃっていたんですね。そのことから、やはり患者さんが語ることでできる場を設けることが重要ではないかと思って

います。今回の研究では、この考察の中にその語りの場を設けましたけども、決して考察の中でなければならないということはないと思うんですね。なので、今後の研究において、そういう語りの場もあるということを考慮しながら、患者さんの語る機会を徐々に増やしていけばいいのではないかなと思いました。

以上です。ありがとうございました。

【引用文献】

Tobin, J., Wu, D., and Davidson, D. (1989). *Preschool in three cultures: Japan, China, and the United States*. New Haven: Yale University Press.